

統合体の概念

著者名(日)	村上 丘
雑誌名	Otsuma review
巻	36
ページ	17-27
発行年	2003-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00004029/



統合体の概念

村 上 丘

0. はじめに

このほど、Komatsu & Wolf (1996), Komatsu & Harris (1993), Komatsu & Wolf (1997) によって、ソシュール〈Saussure〉の『一般言語学講義』の土台となった講義録原本の一部が刊行された。本稿の目的は、この新資料を駆使し、次の2点を明らかにすることである。①ソシュールの提案した〈統合体〉(syntagm) の概念を明確にする。②〈統合体〉の概念を、現代言語学における諸概念と比較する。

1. 新資料の意義

1926年に出版された『一般言語学講義』(以後、『講義』)が、ソシュール自身の執筆した著作ではないにもかかわらず、現代言語学に甚大な影響をもたらしたのは周知の事実である。この書物は、その成立上の複雑さもあって、少なくとも、次の2つの問題点をはらんでいる。①『講義』は、複数の聴講者(コンスタンタン〈Contantin〉・リートランジェ〈Riedlinger〉など)の記録に基づき、その講義を受講していない編集者(バイイ〈Bally〉とセシェ〈Sechehaye〉)が編纂した産物である。したがって、『講義』は、当時の講義の実態、および、講義者自身の思想を直接反映したものではない。②『講義』は、1907年から1911年の5年間に及ぶ3回の講義録を1冊に凝縮したものである。この間に、ソシュール自身の言語学に対する考えには、思想的発展がある。しかし、『講義』はその思想を固定的・静態的に処理し、その系譜的・力動的な展開を顧慮していない。この結果、われわれが読む『講義』は、原資料を「トランプの札のシャッフル」(丸山1981)をするように切り刻まれた「モザイク状のテキスト」(加賀野井1995)である。

この度、Komatsu & Wolf (1996), Komatsu & Harris (1993), Komatsu & Wolf (1997) による一連の作業によって、ソシュールの講義録の一部が、受講者の記録そのままの形で復元されたのは、時宜にかなったものであり、

言語学界にとって画期的な朗報である。さらに、そこには、『講義』の編集者に知られていない受講者パトワ〈Patois〉の手稿も含まれている。Komatsuらの作業が言語学に果たす貢献は、次の2点に集約されよう。①講義の進展を、ソシュール自身が行ったのと同じ時間的順序で読み取ることができるようになった。②『講義』と実際の講義録との相違が明確になり、『講義』の編集者達が、原典をどのように追加・削除・改変したかが明白になった。

丸山(1981)は、ソシュール研究の今後の展望として、『講義』の基盤となった原資料に対し、批判的文献解釈が不可欠であると言明した。そして、第1回講義から第3回講義にいたるまでの記録を実際の順序で読めるような、テキストの復元が早急にもとめられると主張した。Komatsuらの行った今回の作業は、まさに、丸山の希求したものである。この資料に基づき、ソシュールの提案した概念が精密に規定され、言語学・記号学・テキスト理論などを包括するソシュール学が、ますます発展するものと期待される。

2.〈統合体〉の意義

ソシュールは、共時態・通時態・ラング・パロール・恣意性・有契性など、幾多の重要な言語学用語を鑄造した。その多くは、今日の言語学、および、その他の分野で、もはや、ソシュールの案出した用語であると意識されないぐらい人口に膾炙している。しかし、それらの用語と比べ、今回取り上げる〈統合体〉は、ことさら注目されているわけではない。この用語に対する学界の関心の薄さは、種々の言語学辞典におけるこの用語の扱いようによっても窺われる。大部な言語学百科事典でも、〈統合体〉の項目が掲載されていないものもある。一部の辞典は、「音、語、区、節、分から構成される分節によって形成された言語連鎖」(Bussmann (1996))「線的配列をなす関連付けられた構成素」(Crystal (1992))と規定しているが、その取扱は極めて表面的である。

ソシュールの用語の特徴は、その記号学的一般性にある。また、そのほとんどが、2項対立関係にある。それゆえ、構造主義の構築に不可欠の道具立てとして、人類学・社会学・建築学など、言語記述以外の領域でも活躍してきた。

〈統合体〉の概念が、これまで言語学内外で注目されてこなかったのは、次の3つの理由がかかわっていると思われる。①この概念は、音連鎖におい

て存在する言語固有の概念である。したがって、この概念には、記号学的一般性が欠如しており、非言語記号に適用することには困難がある。②この概念は、もう1つの類似概念と2項対立をなさない。したがって、対立概念が欠如しており、記号論的操作が不便である。③この概念は、統語論と形態論とを同時に包括する概念である。これは、現代言語学において暗黙の前提となっている統語論と形態論との分離主義と抵触する。(なお、日本において、syntagm が、〈連立体〉〈統合〉〈連辞〉などと訳され、定訳がないのも、この概念の認知度の低さを物語るであろう。)

しかし、〈統合体〉の概念は、言語学的にみれば、さまざまな示唆を含む重要な概念であると考えられる。その理由は、以下の4点にまとめることができる。

①従来、〈統合関係〉と〈連合関係〉は、言語記号間の2大系列であるとして認定されてきた。そして、あたかも、それらの縦と横の関係のみが、言語記号間の関係を規定するかのように承認されてきた。しかし、〈統合体〉の概念は、これらでは処理できない、第三の系列を含有している。この第三の系列は、とりわけ、人間の無意識の考察において、極めて重要な役割を演ずる。すなわち、〈統合体〉の概念は、人間と言語との関係を論ずるうえで、決定的である。②従来、音韻・形態・統語の分野は、それぞれ、別個に、それぞれの現象を記述してきた。ところで、これら三分野は、便宜的なものであり、先見的に峻別しなければならない必然性は存在しない。それは、孤立語・膠着語・屈折語など、典型的に多様な言語の実相を観察すれば明らかである。たとえば、膠着語においては、形態的变化が文法範疇的情報を担うので、統語論と形態論とが渾然としている。形態と統語を包括する〈統合体〉の概念が、膠着語の分析に適合するのは当然予測される。したがって、さまざまな類型に属する言語を記述する上で、〈統合体〉という単一の概念を援用することは、有効であると考えられる。③ソシュールは、キーワードが幾つかの単音に分けられて散在するアナグラムを行った。アナグラムは、〈統合体〉の概念を、文以上のレベルに適用した論理的帰結と考えられる。すなわち、〈統合体〉は、文以上のレベルにも適用可能であり、修辞学 of 分析にも応用できる一般的概念と考えられる。④〈統合体〉の概念は、ソシュールの独創であるものの、それに類似した概念が、アメリカの言語学者ブルームフィールド〈Bloomfield〉とウォーフ〈Whorf〉によって提起されている。

それは、〈構造体〉と〈潜在型〉の概念である。三者を比較することは、それぞれの概念を精錬させる上で有効であり、生産的であると考えられる。

3. 〈統合体〉の定義

本節では、〈統合体〉の定義を考察する。

(1)「〈統合体〉を構成する原理は一つ、線的連鎖である。(空間、空間の、などの用語は、時間において理解されるべきである、というのも、ここでは、音声言語を扱っているからである。)」〈パトワの手稿 144a〉

(2)「線的連鎖に基づく結合は、〈統合体〉と呼ばれる。〈統合体〉は、必ず、2つあるいは、それ以上の連続した単位から構成される。…〈統合体〉において、単位の価値は、先行するもの、後続するもの、あるいは、その両者との対立において、決定される。」〈『講義』 121〉

(3)「われわれの頭脳には、〈統合形〉が存在する。〈統合形〉を使うや否や、〈連合系〉が導入される。」〈リートランジェの手稿 54a〉

上記の記述は、統合体を規定する最低要件である。これらに加え、丸山 (1981: 102) は、〈結合体〉の特徴として、〈結合体〉は、諸要素の統合結合の規則であるとする。しかし、〈統合体〉を規則と同一視すると、〈統合体〉のもつ具体性が失われると思われる。なぜなら、〈結合体〉は、諸規則の発動により実際に顕現した、〈統合関係〉を結ぶ言語要素である。したがって、Thibault (1997: 65) のいうように、〈統合体〉とは、言語記号のパターンであるとみなした方が、妥当であると考えられる。

4. 〈統合体〉の構成要素

前節で確認したように、〈統合体〉は、2つ以上の要素から成立する複合体である。本節では、〈統合体〉を構成する要素を、そのサイズに基づいて、分類する。

(5)「〈統合体〉の概念は、単語だけではなく、語群にも適用される。それは、あらゆるサイズ、および種類の複合単位に適用される。」〈『講義』 122〉

(6)「統合体論」は、統語論だけに関わるわけではない。単語の下位単位において、〈統合体〉に関わる事実がある。」〈リートランジェの手稿 57a〉

今日の言語学においては、形態論と統語論との分離が、自明とされる。それらを分かちるのは、語のレヴェルである。しかし、ソシユールにとって、こ

これらの領域は、渾然としたものである。なぜなら、語の内部にも、語と語の間にも、同一の概念が適用するからである。ここでは、統合体論が、統語論だけでなく、形態論にも及ぶことが示されている。これは、〈統合体〉が、あらゆる言語レベルの現象を対象とする以上、必然的な結論である。〈統合体〉は、あらゆるサイズ、および種類の複合単位から構成される。それらは、実際には、複合語・派生語・句・文などをさす。これを、具体的な事例と共にまとめると、次のような表がえられる。

〈統合体〉の種類	全 体	部 分
語	re-read	re-/ read
複 合 語	bluebird	blue/ bird
句	at noon	at/ noon
文	The glass was full of water	the/glass/ was/ full/ of/ water
節 と 節	If the weather is fine, we'll go out.	If the weather if fine, / we'll go out.

第3節で述べたように、〈統合体〉は、複数の要素からなり、一つの要素には、必ず、〈連合関係〉をなす語類が取り囲む。その際、どの語類も、言語学的に、同じように重要かについては、吟味する必要がある。すなわち、〈統合体AB〉を構成する言語要素は、AB相互の関係に応じて、いくつかのタイプに分類することができる。

①〈単独作用 (unidirectional operation)〉。〈統合体AB〉において、Aは、B以外に他の要素と共起することができるが、Bは、A以外の要素と共起することができない場合である。たとえば、前置詞句 at noon について考えてみよう。前置詞 at によって規制される名詞 noon と〈連合関係〉を構成する語類は、3:00, dawn, night, dusk, sunrise, sunset などである。これらは、〈時点〉という意味を共有していると考えられる。一方、noon は、at 以外の前置詞を選択することができない。②〈相互作用 (reciprocal operation)〉。〈統合体AB〉において、Aも、Bも、さまざまな要素と共起することができる場合である。例えば、bluebird における blue は、bell, berry, bottle, fish

などと共起する。一方, bird は, (i) red, yellow, black (ii) bee, cat, cow (iii) fire, snow, thunder などと共起することができる。③〈双方向作用〉(bi-directional operation)。〈統合体 A B C〉において, B が, A C という 2 つの要素に対して同時に, 規制する場合である。例えば, A is full of B. における (be) full (of) は, 主語と目的語に対して, 同時に作用する。すなわち, A, B は, それぞれ《容器》と《内容物》を表わす。具体的には, the field/cattle (平面・集合体) the mug/beer (容器・液体), the tank/gas (容器・気体), the sky/stars (空・天体), the room/laughter (空間・音声), her heart/joy (心・感情) のような組み合わせが許容される。

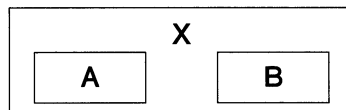
5. 〈統合体〉の内部構造

この節では, 統合体を構成する要素同士の関係を考察する。そこにおいて看過できないのは, 次の記述である。

(7)「〈統合体〉の部分同士の関係を考えるだけでは充分ではない。〈統合体〉の部分と全体との関係も考慮されなくてはならない。」(『講義』122)

部分と全体の関係は, 意味論においてはしばしば言及される。たとえば, finger/hand は, 部分と全体の関係をなすといわれる。一方, 統語論や形態論において, 部分と部分との関係については論及されるにせよ, 部分と全体に言及することは, 少ないように思われる。言語要素間の部分と全体との関係にも注目せよ, という記述は, 重要な指摘であると考えられる。

次のような言語要素の連鎖を想定しよう。



ソシュールに従えば, 〈統合関係〉という用語は, 両義的である。なぜなら, それは, 次の 2 つの意味を有するからである。①言語要素 A と言語要素 B とは, 前後関係にある第一の〈統合関係〉を構成する。②言語要素 X と言語要素 A,あるいは, 言語要素 X と言語要素 B とは, 部分と全体との関係にある第二の〈統合関係〉を構成する。

〈統合関係〉という用語を, これら 2 つの関係に適用するのは, 厳密性に欠

ける。なぜなら、部分と全体との関係は、線的順序の原則に還元することはできないからである。ここでは、第一と第二の〈統合関係〉を峻別すべく、次のような用語法を導入しよう。①第一の〈統合関係〉という用語は、言語要素AとBとの線的關係を排他的に意味するよう限定する。②第二の〈統合関係〉、すなわち、部分と全体との関係を、新しく〈含有関係〉(meronymic relation)と呼ぶ。この結果、ソシュールの導入した言語記号の2項対立的関係は、3項対立関係になる。

4つの語 perceive/conceive/deceive/receive を観察しよう。この時、per-/con-/de-/re-/ceive は、いずれも、単独ではあらわれることができない束縛派生形態素である。含有関係が、話し手の無意識と連動すると仮定すると、話し手は、時間的順序に従って、言語記号を想起するわけではないことになる。例えば、conceive という語を発した話し手を考えてみよう。形態素 con- は、線的順序からいえば、-ceive に先行する。しかし、形態素 con- と含有関係にある語は、conceive であるので、con- だけを発した時、いわば、時間を先取りして、conceive (concern, conduct, confer) と連動する。次に、音的配列順序に従って、-ceive の箇所を発話した状況を考えてみよう。-ceive は、線的順序からいえば、con- に後続する。-ceive は、再び、conceive と含有関係にあるので、-ceive の部分を発した時、いわば、時間をさかのぼって、conceive (perceive, deceive, receive) と連動する。すなわち、人間の意識のレベルでは、統合関係が線的に支配するが、人間の無意識のレベルでは、線的順序に厳格に制約されない。時間を絶えず前後しつつ、当該の言語記号は、それと含有関係を結ぶより大きな言語記号と連動する。

6. 〈統合体〉と〈構造体〉

あるまとまった意味を担う語群を、〈構造体〉(construction)と呼び、〈構造体〉を構成する成分を、〈構成素〉(constituent)と呼ぶ。〈構造体〉を構成する成分は、〈構造体〉より小さな成分であり、形態素・語などが属する。〈構造体〉が、その〈構成素〉と等価の形式類(form class)をもつ場合を〈内心構造〉(endocentric construction)と呼び、そうでない場合を、〈外心構造〉(exocentric construction)と呼ぶ。前者は主要部(head)を持つが、後者は持たない。

〈構造体〉が語であり、〈構成素〉が形態素である場合を考えてみよう。〈構

成素〉が、〈構造体〉に対し〈外心構造〉の〈含有関係〉を示すものとして、income を例に挙げることができよう。この〈構成素〉は in (副詞) と come (動詞) であるが、両者とも〈構造体〉income (名詞) の形式類に属さない。一方、〈構成素〉が〈構造体〉に対し〈内心構造〉の〈含有関係〉を示すものとして、blackbird を挙げることができる。この〈構成素〉black と bird のうち、bird は〈構造体〉blackbird の形式類と同一である。

〈構造体〉が句であり、〈構成素〉が語である場合を考えてみよう。〈構成素〉が、〈構造体〉に対し、〈外心構造〉の〈含有関係〉を示すものとして、if you like を挙げることができる。if you like という構文自身は、その部分である接続詞とも、名詞句とも、動詞とも代置可能でない。一方、〈構成素〉が〈構造体〉に対し、〈内心構造〉の〈含有関係〉を示すものとして、Jack and Jill を挙げることができる。このとき、Jack and Jill は、Jack (あるいは Jill) と同一の形式類に属する。

〈構造体〉の概念は、語と語の関係を示すだけでなく、形態素と形態素の関係を示す。〈構造体〉も〈統合体〉も、全体と部分との関係において成立するという共通点を有する。もし、〈統合体〉を〈構造体〉とみなすことが可能であるなら、〈統合体〉内にある要素のとりもつ〈含有関係〉を、2つに下位区分できることになる。すなわち、22 頁の図における言語要素 X と言語要素 A とが、同一の統語範疇に属する〈統合体〉は、〈内心構造〉を構成し、そうでない場合は、〈外心構造〉を構成する。

しかし、〈統合体〉と〈構造体〉とは、別個の原理によって成立する概念であり、〈内心構造〉と〈外心構造〉の区別は、〈統合体〉には、適用できないと思われる。

両者には、次の2つの相違がみられる。①〈構造体〉の概念は、形式類という基準で構築されている。すなわち、統語範疇が、各言語要素を決定付ける。一方〈統合体〉の概念は、形式類の基準ではなく、依存関係の基準に依存している。すなわち、主語や目的語という概念が、要素を決定付ける。②〈構造体〉の概念は、当該の言語要素にのみ、関心を置く。一方、〈統合体〉においては、〈連合関係〉の概念が重要な働きをし、具現していない言語要素にも、関心をよせる。

〈構造体〉の概念は、〈内心構造〉と〈外心構造〉に二分されるが、その区別は、必ずしも、自明なものではない。たとえば、《動詞十目的語》の構造

は、〈内心構造〉と〈外心構造〉とに関し、学者によって見解が分かれる。一方、〈統合体〉には、〈内心構造〉と〈外心構造〉の区別を必要としないので、上記の問題は生じない。

7. 〈統合体〉と〈潜在型〉

この節では、〈統合体〉と〈潜在型〉とを比較する。はじめに、次の記述を観察しよう。

(6) これら2つの原則は、2つの軸で表示することができる。(1つの原則は、以下のものである。)

un-do (統合的)

同時に、もう1つの原則は、心的に存在するもう1つの軸において示される。これは、連想によって結合されるあらゆる可能性であり、ある要素を雲のように取り巻く無意識の思考である。

redo
do
undo (連合的)
untie
unlock

〈リートランジェの手稿 56a〉

ここで、ソシユールは、フランス語 *defaire* (=undo) を例に出して〈統合体〉を説明している。これは、ウォーフが、〈潜在型〉を規定する際、例として掲げた *untie* を想起させる。なぜなら、*defaire* に含まれる接辞 *de-* も、*untie* に含まれる接辞 *un-* も、共通して、《反対動作》を表すからである。フランス語と英語との相違はあれ、大西洋を隔てて、二人の言語学者が、同様の問題意識をもち、同類の資料を考察しているのは興味深い。

〈統合体〉と〈潜在型〉を比較すると、少なくとも、次の2つの相違が顕著である。

① 〈統合体〉は、どのような言語レベルであれ、少なくとも、2つの言語要素から成立する。したがって、1つの〈統合体〉は、2種類の〈連合関係〉が成立する。上の例でいえば、1つのタイプが (undo-redo-do の) 語基 *do* を共有する系列であり、もう1つが (undo-untie-unlock の) 接辞 *un-* を共有するタイプである。

一方、ウォーフは、上記の2つの現象に対し、異なる名称を与えている。すなわち、undo/redo を例にとると、un-/re- 自身の意味は、古典的な形態論上の概念に相應し、その意味を確定することは、容易であるとする。すなわち、un- は《反対動作》を表わし、re- は《反復動作》を表わす。彼自身は、それら、接辞としての形態素の意味を、〈顕在型〉(phenotype) と呼ぶ (Whorf 1956: 70)。〈顕在型〉は、時制・相など、さまざまな文法的標識などに検出される。語基を共有する形式は、派生形 (derivative) として関係付けられる。派生形は、語基に、接辞という〈顕在型〉が付加した形式である。

② 〈潜在型〉と〈連合関係〉には相違がある。ウォーフは、同一の接辞を共有する語群は、明示的ではないが機能的に重要な意味的共通性をもつと想定している。すなわち、uncover, uncoil, undress, unfasten, unfold, unlock, unroll, untangle, untie, unwind などの語形を観察すると、un- が付加する動詞は、《中心に向けて覆うこと》を意味している。この意味に正確に対応する動詞は、存在しないが、その意味を、〈潜在型〉と呼ぶ。〈潜在型〉は、接辞を共有する〈連合関係〉を持った語基の語群である。一方、ソシュールは、〈連合関係〉を構築する語群が、意味だけでなく、形式、および、意味と形式の共通性から成立するとみなす。したがって、〈潜在型〉より〈統合体〉の方が、対象となる語群の数が多い。

〈統合体〉は、〈顕在型〉と〈潜在型〉の両方に関係する。接辞と語基とからなる〈統合体〉を例にとると、〈統合体〉は、接辞と語基の複合体、〈顕在型〉は、接辞、〈潜在型〉は、〈連合関係〉を有する語基に対応すると考えられる。

参考文献

- 加賀野井秀一. 1995. 『20 世紀言語学入門 現代思想の原点』講談社.
- Komatsu Eisuke & Gorge Wolf. (ed. and tr.) 1996. Saussure's First Course of Lectures on General Linguistics (1907) from the notebooks of Albert Riedlinger. Pergamon.
- Komatsu Eisuke & George Wolf (ed. and tr.) 1997. Saussure's Second Course of Lectures on General Linguistics (1908-1909) from the notebooks of Albert Riedlinger and Charles Patois. Pergamon.
- Komatsu Eisuke & Roy Harris. (ed. and tr.) 1993. Saussure's Third Course of Lectures on General Linguistics (1910-1911) from the notebooks of Emile Constantin. Pergamon.

- 丸山圭三郎. 1981. 『ソシュールの思想』 岩波書店.
- 村上 丘. 2002a. 「潜在型の概念」『21 世紀の英語教育への提言と指針—隈部直光教授古稀記念論集—』 開拓社.
- 村上 丘. 2002b. 「パッチワーク分析の方法」『大妻レビュー』 第 35 号.
- Thibault, Paul J. 1997. Re-reading Saussure. The dynamics of signs in social life. Routledge.
- Whorf, Benjamin Lee. 1956. Language, Thought & Reality. Edited by John B. Carroll. The MIT Press.